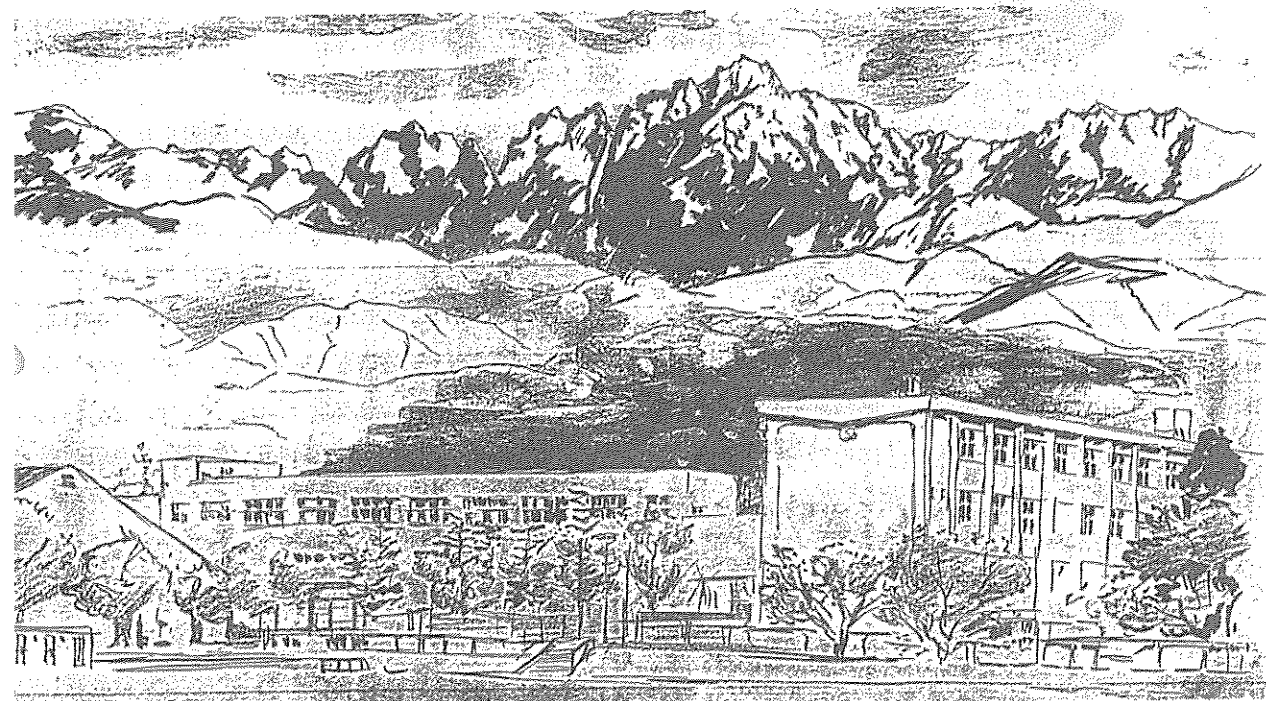


同窓会報

第41号

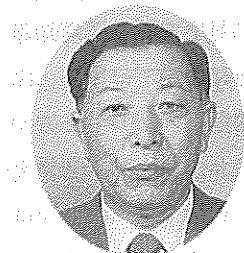
平成5年8月22日発行

富山県立上市高等学校同窓会



新任挨拶

同窓会長 柳 瀬 菊太郎



会員各位には益々ご健勝でご活躍のこととお慶び申し上げます。

さて、昨年の総会において伝統ある同窓会の会長に任ぜられ、その重責に戸惑うと同時に身の引締まる思いであります。もとよりその器ではありませんので再三にわたりお断り申し上げましたが、先輩各位から「君は母校で長く勤めたんだからお返しなさい」との言葉に浅学非才をも顧みず引受けた次第であります。

思えば34年間にわたり会長を勤められた山本宗問氏は今日の同窓会の礎を築かれ、池田嘉重会長は伝統の上に新風を吹き込まれました。そして前藤原平蔵会長は創校70年記念の大事業を完成されました。その業績に心から敬意を表する次第であります。

本会は会員各位の熱意により10年毎に母校のために記念事業を興してまいりました。私は長い間母校にあって

各会長始め会員各位から多くの指導や薫陶を受けました。今更ながら深く感謝申し上げる次第であります。

同窓会も本年3月に新会員330名が入会され、累計18,542名の同窓生となり力強く発展してまいりました。今後も会員各位のご意見を承り、従来の良き点を継続すると同時に支部活動の強化をはじめ、本会の目的の一つである母校の教育伸展に協力する等、新たな発展を目指したいと思っております。

創校以来一貫した校訓「勤労・自治・向上」の精神で育まれた同窓生が母校を愛し、友情溢れる同窓会として躍進するよう微力ではありますが努力する所存であります。

同窓会の発展こそ母校の伸展そのものと確信いたします。会員各位のご指導、ご支援を切にお願いして挨拶いたします。



情熱・意欲と創造性をもって

上市高等学校校長 高森 弘

峻嶺劔岳には、白雪の岩が翡翠の結晶のように、日の光をまぶしく反射しています。

その山壁を縫い、滔々と流れる清流を横に緑豊かなこの教育の聖なる地は、私の最も好きな光景の一つであります。

私はこの4月に本校に新任校長として着任いたしましたことに対して、素晴らしい感動を感じますと同時に、その責任の重大さと、リーダーとして、教育のシンボルとして、学校の代表として、自覚しなければならぬという緊張を日々感じております。

さて本校は、郡立の富山県中新川農業学校として開校されて以来、70余年経過いたしました。これまで数度にわたり課程や学科の変遷を経て今日に至り、その間の18,000余名の卒業生の方々が、県内外で大いに活躍されていることはご同慶の至りであります。

これらの本校の歴史を大事にして、学校の進むべき方向を見誤らぬように、同窓会の方々や地域社会との連携を重視して、全体をみて、解決すべき問題の本質をみて、浅い経験ではありますが、先見的創造性をもち、論理的に妥当性のある運営を図るべく努力する所存であります。

又本校の教員の能力が充分発揮できるような環境づくりにも留意し、少しでも本校が前進するように同窓会の方々の期待に添えるように情熱を傾注したいと思っております。

人事異動のねらいには、職場に新風を吹き込み、その活性化を図ることがその一つでありましたが私にはそんな力はございません。しかし、情熱・意欲をもって努力をしたいと思っております。

今では上市のこの地が好きになりました。それは、他の町にはない住民の方々の素晴らしいパワーを感じるからであります。

上市町総合体育館の竣工も間近であります。本校でも同窓会館（劔嶺会館）・バイオ棟に続いて、第一体育館の新築、更に硬式テニスコート（三面）が今年度中に竣工される予定であります。これらはすべて、皆様方のお陰でございます。このご厚情に応えるべく学習活動・部活動等において努力を惜しむものではありません。

高校教育では、時代の変化に対応できる基礎知識の修得はもちろん、ものの見方においては広く、深くさらに多様であるように。柔軟性のある考え方ができるように。そして一生涯にわたり、友人関係が続けられる友人をもち、さらに社会生活においては自分の行動に責任をしっかりとつことのできるような人間の育成。等が大きな目標であると思っております。

今後とも皆様方の変わらぬご指導・ご支援・ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。



◇◇◇思い出◇◇◇

卒業50年

『思い出の記』

私達20回生は、入学が昭和13年4月、卒業が昭和17年12月で、文字通り戦争の真只中、3ヶ月短縮の学年である。

天皇制は絶対で、民主・自由・平和は悪とする狂信的な帝国主義の論理が国全体を覆った時代で、学校の教育も生活もこの波をモロに被った。しかも私達は余りにも幼く、その正否を考えたり論ずる力など全くなかった。先生方も私達も、ただ一生懸命、その誤った国策に従うという学校生活であった。

教課では、軍事教育が最重要となり、配属将校の権限は絶対的で、言訳は一切許されなかった。教練に悪い点を貰ったら、軍入隊後の昇進はないと噂され、みな恐れたものだ。

反対に、英語は敵性語として冷遇され、時間は減らされ程度は低く、卒業時の英語力は恐らく中二程度だったと思う。この時の勉強不足によって、私などその後の進路選択、受験が制約され、社会に出てからさえも大いに苦しむこととなった。

他方、実技実習面では、体力増強、食糧増産が重視された。体力検定が実施され、その成績によって上、中、初級のメダルをくれた。しかし、重量物運搬や手榴弾投げ、障害物競走など、チビの私には手に負えず、60kgの土嚢を軽々とかつぎ上げて疾走する級友達は恐ろしいような存在であった。そして上級のメダルを帽子に付けて得々と歩く級友には大きなコンプレックスを持った。また、魚津市往復36km競

上市農林学校林業科 第20回 (昭和17年12月卒)

松永繁雄

歩大会では、歩いて歩いて着かず、握り飯とスベアの草鞋を腰に吊して、ヨレヨレの姿で桜並木に通り着いた時の嬉しかったこと。夏休みには開墾の為、炎天下連日、丸山農場に通い唐鍬を振った。手足は豆や汗ものヨリが一杯でき本当に辛かった。

しかし、そんな中にも収穫感謝祭で全校会食のカレーライス、養蚕当番宿直の自炊での馬鈴薯と玉葱の味噌汁の味、大きな田舎油揚げを焼いて一人一枚平げて、先生からゼイタクだと叱られたこと——など、農林学校らしい体験は、今も心に残っている。

やがて戦局は急速に傾き、学校の教練用の明治38年式歩兵銃が徴用されて行き、私達も3ヶ月の練上げ卒業となった。

それから50年が過ぎたという。物も無く暗き時代の5年間ではあったが、本当に良い学校、よき師、よき友に生まれ幸せであった。思い出総てが美しく懐かしい。最後に、今の若者たちの歌を借りて、私の溢れる思いの結びとする。

固い絆に想いを寄せて

語りつくせぬ青春の日々

時には傷つき、時には喜び

肩をたたきあったあの日

君に幸あれ

卒業50年

『今昔を越えて』

昭和17年8月、田舎過ぎの東京に、担任の青木・堀両先生に引率された百名近い上市農林学校生徒の姿があった。当時、旅行は軍需物資の輸送を助け、国家総動員法の趣旨に悖るとして自粛を求められていたし、この年の四月に空襲を受けた東京には、安全の上からも問題はあったが、担任の「広い世間を見せてやろう」の発想が、宮城の勤労奉仕という目的に絞られて実現した。戦後、技術革新が進み、本土の時間距離は大幅に縮められたが、この時点では富山から上野まで、十数時間の煤煙と汗にまみれる汽車の旅しかなかった。いま、一番速い列車の三倍から四倍の時間をかけ、計り知れない疲労を覚悟しての旅は、さらにその何ヶ月も前から、心構え、服装、所持金品にいたるまで細かい計画が組まれ、生徒は何組かの班に編成して事故防止が図られた。今のように飲食・寝泊り自由な時代と違って、総て決められた計画に従うという窮屈な旅行だったが、生徒は初めて見る東京に胸躍らせ、農林学校最後の想い出を残そうと期待して、富山を後にした。大部分の生徒は17歳、両先生も40歳代前半だったと思われる。

東京の何をどのように見たかは、50年の年輪に妨げられて記憶は定かでないが、残っている写真等から、宮城、明治神宮などを回り、再び長い汽車の旅

上市農林学校農業科 第20回 (昭和17年12月卒)

塚原 勲

で富山に戻っている。

先の大戦で焦土と化した東京への、一極集中が議論されて久しいが、何といたっても政治・経済、産業・文化等々の中心地として成長を続け、これを「不死鳥」に例える人もあるとか、うまい表現だと思う。ところで過日、久方ぶりにこの「不死鳥」を訪ねた。富山から長岡で乗継ぐだけで、東京駅へ滑り込む。用務先の虎の門まで地下鉄を利用したら、ドアの上の表示盤に始発終着の駅名と次の停車駅名が赤ランプで、今どこを走っているかの矢印が緑ランプで、駅に着く前にドアが開く側のオレンジのランプが点滅する。戦後間もなくのころ上京して、不安に思いながら利用したとき、こんな案内表示があればいいがなあと考えたことが実現している。同じことを思った人がいたのだなあと自惚れていたら、神谷町に着いた。午前中は座っておればよいが、午後全国発表が待っている。発表もやってくれる機械ができたなら、大騒ぎして新幹線をつけることも、地下鉄の表示盤も要らないかもしれない。だが、そうなれば苦労して調べてまとめて、汗をかきながら発表した後の成就感もないだろう、「ああ、うまくいった」という小さな喜びと、それを求める努力は、時代が変わっても、我々の生涯につきまとうものらしい。

卒業40年

『小学区制の提言』

新しい学校制度を中心とした戦後の教育改革は、戦争による破壊と混乱からの復興に、また自由主義

上市高等学校普通課程 第5回 (昭和28年3月卒)

高井 芳樹

社会と経済大国の建設に、計り知れない多くの活力と人材を送り出した。

私達は歴史的な宿命で、その新制中学校及び新制高校の第一回生を体験した。(1回生とは1年生からの1回目と云う意味)新制高校の最も優れた点は、その厳しい小学区制度であった。上市区域に在住する者は全て上市高校へ進学しなければならない制度(工業、商業は別)は、一見自由な選択権を子供から奪うような硬直さを思わせるが、高校がほぼ義務教育化した現在、これほど素晴らしい制度はなかったと思う。人間教育で最も大切な個性の伸張と協調性の育成を考える時、現在のように県内の希望する高校へ自由に受験できる大学区制度が、高校に偏差値のランクづけを生み、それが教育面で多くの障害になっている現状を、誰もが気づいている筈である。

地元の殆んどが地元の高校に進学する小学区制は、地域社会に活力を与え、その誇りを高揚し、個性豊かで隣人の痛みがわかる人を育ててくれました。単

なる知識や記憶力に重点を置いた所謂偏差値教育に基づいた大学区制が如何に子供達の心に深いインフエリオリティを刻んだかは、私達の世代の多くの人が知っている。

私はたくさんの個性的な同級生に恵まれました。東大を出て茨城大教授になっている橘豊君、女医では県内ナンバーワンの二本垣まち子さん。日本の代表的なトランベッター荒尾正伸君。大岩日石寺管長の中田真弘君。町議会議長の堀宏君。第一薬品工業専務の堀田政夫君。萩中幸雄君はじめ小中学校長が6名。他にも夫々の分野で貴重な活躍をされている多くの異色の人材が居るのも小学区制の賜である。モノより心、大より小の時代と言われる昨今、よき高校時代をすごさせて頂いたことにつくづくと感謝しています。

卒業30年

上高. 上高

われらが上市高、

須田監督が指導された野球部が強かった。昭和35年、36年連続で北越大会準優勝(甲子園大会出場、夢に終る)であったが誠に強く県予選の一試合ひと試合ごと勝ち進む上高に、若武者群団の勇姿があり、破竹の勢いを絵に描いた様であった。

先生と生徒が丸になって燃えたことは言うまでもないが、地元上市の町全体も地元の上市高校と一体になって応援いただいたことは思い起しても記憶に鮮明である。

応援歌がないということで、野球部の顧問であり、音楽にかけては第一人者の浅岡節雄先生がつくられたのが冒頭の応援歌であるが、勝ち進む野球の試合

上市高等学校農業課程 第14回 (昭和37年3月卒)

上田昌孝

ごとに大きな声を張り上げて歌うのであるから生徒達の心に母校愛が形を変えて、知らず知らずの間により強くなっていったことは間違いない。

バスケットボールは7・8人の部員で県大会優勝、お家芸の馬術も常勝であった。ボクシングもしかり、団体に何人も出場していったし、自転車競技やスキーにも県を代表する選手を輩出していた。又、チャンピオンになれなくてもスポーツ全体が盛んであった。それだけに心身共に健康な生徒が多かった。

そんな時代にあって、普通課程に勉強に熱心な、藤縄先生があり、スポーツ群団に負けるなどということで大変な力の入れ様であったので進学の実績もか

なりのレベルであったことは、農業課程にいた私にとってかなり後になって知ったことである。

書きたいことはいっぱいあるが、一点しほりで思い出を記すことにした。

“勤労”“自治”“向上”は今でも私の銘詞として生きている。同窓の皆さんもそうであると信じている。これからの人生も更に……。

卒業20年

過去・現在 そして未来へ……

20年という時間の流れの速さに驚かされる。しかし、周囲を見ると、時間の流れに気付く。周りの自然、私達を取り巻く社会・経済状況、自分の家庭を見ても確実に変化しているのです。そんな変化の中でも変わっていないモノがあるとすれば、それは私達の同窓生としての『絆』ではないでしょうか。

学生時代には特に意識していなかったモノ、卒業してからも仕事や生活の流れの中にとつつい忘れかけていた『絆』。今年の「20年組の集い」という機会に旧友に会えると、20年前の『絆』に気付かされる。やはり『絆』は結ばれていたのである。20年という空白があっても、単に時間に流されていたとしても。

同じ学校に入学し、同窓生として出会ったという事実。そして、この出会いを通じて同じ行事、目標に向かって、同じ汗をかいたり、笑ったり、涙した3年間があった。

卒業してからは各人別々の人生を歩んできた。例

上市高等学校普通科 第25回 (昭和48年3月卒)

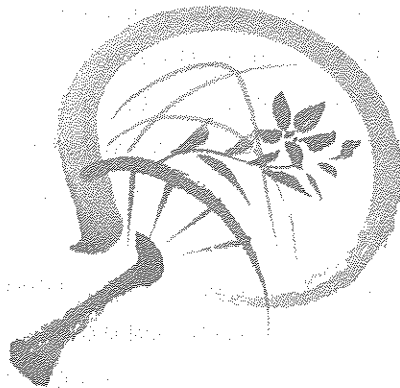
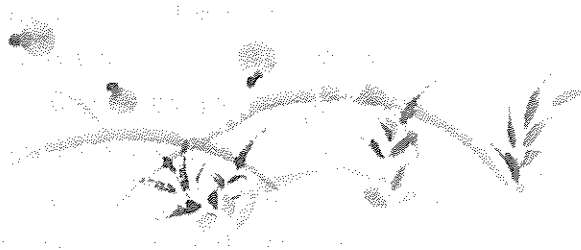
種井 寿一

え違った人生であっても私達の『絆』というものはいつまでも残るであろう。

私達は今までに数多くの人達と出会ってきました。これからもたくさんの人達との出会いがあると思います。今この「20年組」の友人達もその中の一人です。私達の人生のなかの出会いには「偶然の出会いはない。必ずそこには意味がある」と言われています。私達が出会ったのにはどんな意味があるのでしょうか。今一度この機会に考えてみるのもよいのではないのでしょうか。

人はひとりでは生きていくことはできないのです
人は出会いにより人となり

かかわることによって
すべてを発見し、実感し、見るにつけ、創造していくのです



卒業10年

『高校時代を振り返って』

上市高等学校 普通科 第35回 (昭和58年3月卒)

石橋良成

「ああ、もう10年か……」

この原稿依頼を受けたあと、自然に出た言葉である。

10年もたてば、平凡な高校生であった私にとって、当時の記憶もうすらいで、今ではほんのわずかな思い出だけが頭の片隅に残っているだけである。記憶を呼び覚ますため、当時の生徒会誌とアルバムを眺めてみた。あつというまの3年間であったが、けっこういろいろなことをしてきていることにまず驚いた。

比較的印象に残っているのは2年生の時の予餞会である。我々のクラスはステージ発表としてヒット曲をメドレー形式で発表することになり、普段そんなに目だたない私までがステージで歌うことになってしまった。初めは出ることを拒んでいた私も、クラスのムードの高まりに流されるまま出演。当時の漫才ブームではやった「うなずきマーチ」を振り付け入りで歌った。800人近い人数の前で大爆笑された経験は、後にも先にもあれ一度きりであろう。

次に思い出すのが体育大会。私の属した朱雀団は毎年2位、紫燕団が四年連続で優勝していたことを記憶している。元来、運動音痴の私は競技の面では活躍できなかったが、絵を描くのが得意ということもあってアーチづくりで団に貢献できたと思う。何日もかかって、大きな台紙に一つの絵を描きあげた時の感激は今でも忘れない。

話は変わるが、私は7年前、上市高校に教育実習生としてお世話になっている。2週間という短い期間だったが、部活動や球技大会にも参加し、教師として上市高校やその生徒を見ることができ、とてもよい思い出になっている。暮ってくれた者が多かったせいもあるが、「素直な生徒が増えたなあ」というのがその時の印象である。

まったく個人的なことばかり書いてしまったが、お世話になった先生方のことや多くの同窓の人たちとの出会いのことは、血と肉の中に入り込んでしまっていて、急にはよみがえってこないようである。

卒業50年

『勤労と自治と向上、 三つの語を しるべとなして…』

上市農林学校林業科 第20回 (昭和17年12月卒)

金子信一

忘れかけた校歌の一節を口ずさみながら、思い出の糸をたぐってみよう。

1. 勤労作業や実習はつらいこともあったが驚きや感動をよび、経験領域を広め友情を育んだ。白萩丸山の開墾作業は、くわでの力のある作業であった。それでもみんなは文句もいわず辛抱よくがんばった。
2. 柔・剣道・軍事教練・体力テスト・マラソン大会などで鍛えられた。全校朝礼・終礼、銃剣術、

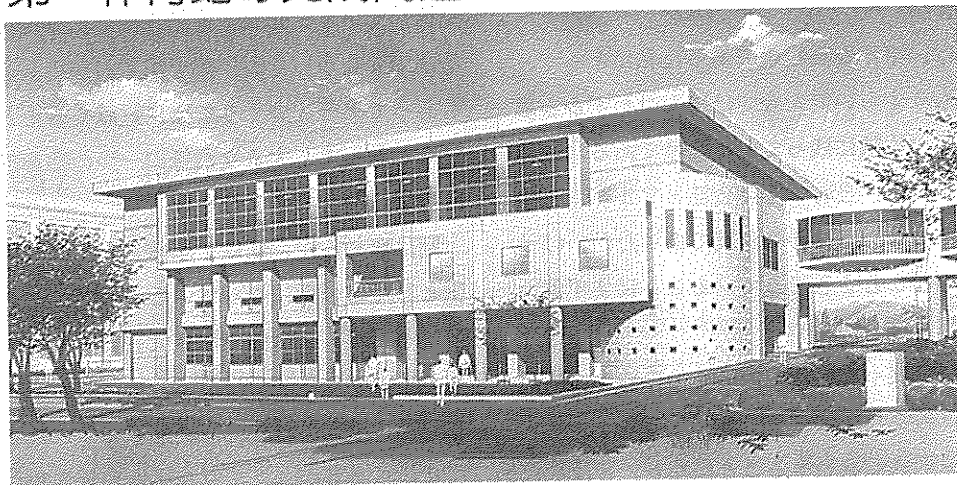
軍事教練もきつかったが、戦時体制下であり、ボヤボヤできなかった。

3. もっと読書に親しむべきであった。読書することや、社会の動きに目を向けることを忘れ自主性を失っていたのでは。
4. キカン気の連中が仮にいたとしても、あれからもう50年。今はみんな好々爺である。

(原稿を一部、割愛したことをお詫び申し上げます)

母校の動き

第一体育館の完成間近



昨年から工事を進めて来ました第一体育館

本館と渡り廊下で連結したモダンな姿を現わしつつあります。

ブロンズ像「陽春」建立

陽春によせて

万物が動き、生まれ出ようとする自然の力に満ちあふれた“陽春”を、人と三羽の小鳥の構成で表現しました。

21世紀に旅立つ若者にとって、さらに新しい可能性への挑戦とその発展は創造的文化と豊かな自然との結合、調和に支えられるものであろう。

母校を思い、人間と自然を愛し、自らの人生を切り開いて行けることを祈念して制作にあたりました。

作者 中川敏之先生のプロフィール

所属 日展会友

富山県彫刻家連盟会員

受賞 亜細亜現代美術展奨励賞受賞

日彫展日彫賞受賞



平成4年度 卒業生記念品
ブロンズ像「陽春」

石碑「樹恩」建立



平成4年度 農林工学科

石碑「樹恩」

平成3年4月から農林工学科が募集停止され、平成5年3月最後の卒業生を送り出しました。

それを記念し、石碑「樹恩」を前庭に建立し、永久にその足跡を留めることになりました。

碑文は福島功校長によるものであり、書は植野美千代先生によるものです。

よろこびのことば(除幕式にて)

生徒代表 大村和稔

林業科に始まり、50余年にわたる農林工学科がこの3月でピリオドを打つことになりました。

私達の夫々の心の中に一抹の淋しさを、禁じえませんでした。しかし、今日ここに立派な石碑を建てていただき、最も幸せな生徒であったと感謝しております。

農林工学科の歴史の重みを永遠に記念し、私達の行く手を見守ってくれています。

『年輪に 萌ゆる若葉の 影重ね』

校長先生から戴いた碑文を心のささえに、私達は頑張っていきます。

卒業後、いつか学校を訪ねた時に、ドッシリと、温かく迎え、青春時代を思い起こさせ、励ましてくれるものと思います。

終りに、石碑の建立にご協力を下さった関係の皆様へ感謝を申し上げ、よろこびのことばとします。

平成5年2月19日